

宇宙刑事

エクザリオン

小説 斐芝嘉和

挿絵 赤 木

立ち読み版

プロローグ	006
第一章 宇宙刑事の休日	021
第二章 砕かれる誇り	043
第三章 受胎	072
第四章 汚されたエクサリオン	108
第五章 抵抗	141
第六章 淫獣誕生	187
エピローグ	245

登場人物紹介

Characters



狭霧 菊花

スーツの似合う女性刑事。エクサリオンに変身して怪人たちと戦う。男勝りで、正義感溢れる人柄。女性であることに密かにコンプレックスを抱いている。

長谷 直弘

菊花の後輩刑事。スラリとした長身の優男。刑事として優秀な菊花を尊敬している。

ルード

宇宙犯罪組織「ロ・マール」の幹部。外見は、美形の青年。

スクロフ

宇宙犯罪組織「ロ・マール」の地球方面担当幹部。

同じころ、魔空間――。

※

「くろう……っ！」

呻く菊花の身体が、高く持ち上げられた。手足に絡みついてるのは怪人の右手から伸び出した触手。仰向けた掌の上に女刑事を載せ、元親指が右腕に、人差し指が右脚に絡みつけている。薬指は左脚、小指は左腕に。クルクルと巻きついた触手は女刑事の四肢を凄まじい力で引き伸ばし、大の字に拘束していた。緑の肉茎が関節に喰い込み、ギリギリ締め上げてくる。残った中指は股下から接近し、太腿から腹へと這い上がって、紅い装甲服の胴体に二重三重に巻きつけていた。

ミシ……ミシミシ……。

身体のあちこちで、エクサリオンが軋んでいる。石に激突してもコンクリートの壁を蹴破っても傷ひとつついたことのない装甲だが、エネルギー供給を絶たれたいまは無敵ではないらしい。

(くそ！ 脚さえ動かせれば……)

R B Gを使えなくても、踵の蹴爪で引っかければ触手を断ち切れるのだが――肉紐に巻きつかれた脚は凄まじい力でまっすぐ伸ばされ、わずかに捻ることしかできない。左右に開かれた腕は曲げられず、手首を締められているために指にも力が入らなくなってきた。

「なんだここは？ イイ気分だぜ」

バックアップを失ったエクサリオンとは逆に、怪人は異次元空間から力を得ていた。身体が一回り大きくなり、切り株のようになった左肩がモコモコと膨らんで――。

ズル、ズルルル……。

青い体液を垂らしつつ伸び出した三本の太い肉肢が、互いに絡み合い、関節のない腕を形作る。指のつもりか、先はいくつにも枝分かれし、さらに細く伸び出していやらしく蠢く触手の束と化した。

（お、おぞましい！）

一メートル以上に伸びた新たな指の先には、茸の笠のような膨らみがあった。尖端には小さな穴があり、透明な蜜の滴が膨らんでいる。緑の表皮に粘液を滲ませ、ヌメヌメと光るペニスのカリカチュア――それが数十本も、鎌首を揺らしてうねっている。

「うひゃひゃ、なんだコレ？ オチンチンがいったいだあ」

「あ……やめろ、触るなっ！」

束になった亀頭の群が、美乳の形を再現する胸の装甲に迫ってきた。一度花のように先を広げてから、右の釣鐘型に覆い被さる。

（クソ……！）

紅い装甲を包み込み、キュッキュッと擦りつけられる無数の肉クサビ。ルビーのように

硬質な輝きが、拭いつけられた粘液に汚されていく。

感触はない。が、エクサリオンに誇りを抱いていた女刑事の自尊心は、深く傷つけられた。こんなチンピラにいいように玩ばれて、反撃することもできないとは——と。

「硬いオッパイだな。揉み解してやろう」

触手の表面に青筋が浮き、棹部がキュウツと緊縮した。釣鐘型の装甲がミシ、ミシ、とイヤな音を立てて軋む。

(こ、壊れる？ そんな、耐えてエクサリオン……！)

菊花の祈り虚しく、パキン！ と硬いモノが割れる音が聞こえた。乳房にかかる圧力。一部が欠けたことで応力分散が崩れ、ポキポキ、パリパリと割れていく。

一旦触手が離れると、右のカップ全体がクモの巣のような亀裂に覆われていた。ところどころ剥がれ落ち、黒いインナースーツが見えている。

「さあ、見てやろう」

大男がいやらしく笑い、一本の触手を上げた。鎌首の尖端がひび割れにかかり、ゆで卵の殻を剥くように、紅い破片を一枚、また一枚と剥がし始める。

現れたのは、黒い薄布に包まれた美乳。大きさは小振りなメロンほど。重みを支えている装甲がなくなっても垂れることなく、小さなポッチを浮かせた頂点が生意気そうにツンと仰向いている。胸筋の膨らみからなだらかに立ち上がった稜線は、やや外を向いた乳首

を経て豊かな丸みを持つ下面へと続く。両手で下を支えてもなお余りある、ズッシリと重そうな豊満な乳房だ。

「ほう？ いい形をしてるじゃねえか」

鼻の下を伸ばした怪人が、右手の触手を動かして菊花の身体を揺すった。タプンタプンと跳ね踊る乳球。

（く、そう……！）

揺れる肉釣鐘が自らの重みで捻れ、麓に揉み込まれているような感覚を覚える。残っている左の装甲に当たると、ペチン、ペチン、と音が立ち、胸の谷間が熱くなってしまう。

「たつぷり肉が詰まってるみてえだな。どうれ、揉んでやるか」

「あ……くうっ!？」

艶のない黒布の上に、小さな亀頭が押しつけられた。途端、柔肌にコリコリとした硬さや気味の悪い生温かさを感じる。布に見えるが布ではない、ナノマシンの集合体。極めて薄い素材だから、擦りつけられる触手が粘液に濡れ、ヌルヌルしていることまで分かってしまう。

（落ち着け、私。大丈夫、このインナーは破れない……）

自分に言い聞かせ、迫り上がってきた嫌悪の悲鳴をどうにか抑え込む菊花。布状に連結したナノマシンは引っ張られると自ら接続を組み替え、伸張分を埋め合わせる。乾いた液

体に包まれているような感じだ。破れず、燃えず、溶けないボディスーツ。首から手足の先まで切れ目なく覆うこの服があれば、陵辱は免れる——が。

「おお、ツルツルして気持ちいいな」

女刑事の葛藤など、怪人はお構いなしだった。数十本もあるミニチュアペニスをすべて持ち上げ、小さな亀頭で黒い乳房を包み込む。

「く……んん！」

四方八方から押し歪められる肉釣鐘。敏感な乳肌を滑る生温かなぬめり。油に濡れたいくつもの小さな手に、寄って集って揉みまくられているような——気持ち悪いのに、ムニユムニユと歪められた乳房には快感が溜まる。解された柔肉が火照り、どうしようもなく蕩とろけていく。

「や、やめ……ろお！」

愛撫された柔肌が、微熱を帯び始めた。汗が滲み、蒸れて、ムズムズしてくる。まるで無数のイトミミズが這い回っているような感覚。そこを亀頭に揉まれると、微妙なむず痒さが散り、ホッと溜息が漏れそうになった。

(ダメだ、溜息なんか漏らしたら……)

まるで気持ちよくなっているみたいではないか。そんな屈辱は、絶対にイヤだ——唇を噛み、懸命に声をこらえる菊花。その心を見透かしたように、



「どうした、オッパイ揉まれて感じちまったか？」

いやらしく笑った怪人が顔を覗き込んでくる。

「ち、違うわよっ！ その汚らしいモノを避けなさい！」

慌てて叫んだ声が、上擦ってしまった。恥ずかしさに鼓動が跳ね上がり、顔がカアッと熱くなる。

「そうツンケンするなよ。こんなイイ身体してんだ、男を知らないワケじゃないだろう？」
「なにを言ってる……あんっ!？」

胸先に閃く快感。ハッと見下ろすと、うねる緑の肉茎の下、黒い膨らみの頂点に、ひとつの亀頭が喰いついていた。比喻ではない。鈴口が唇のように開き、乳首をしっかりと啣え込んでいる。

「もう硬くなってるじゃないか。正直になれよ、感じてるんだろう？」

粘つく声に、菊花の頬が赤らんだ。いくら心で拒んでいても、若い女性の敏感さは変えられない。肉突起をキュウ、キュウツと捏ね潰されると、鋭い感覚が乳丘を貫いて走る。柔肉の芯に溜まっていた熱の塊が急に膨れ上がった。柔肌の裏をチロチロ炙る淫欲の炎。神経が掻き立てられ、擦りつけられる亀頭の細かなディテールまで分かるようになる。

「くう……あ？ ああ、やめ、ろお……っ！」

柔肉を撫で回す亀頭の動きが変わった。乳首を啣えた鈴口に合わせ、じわり、じわり、

とリズムカルに圧力をかけてくる。肉丘の麓から先へ向けて、しごくように、搾るように——乳房の奥に溜まっていた熱いモノが、出口を求めて迫り上がってきた。ぬめる小孔にしゃぶられた肉突起がたちまち膨れ上がり、微弱電流を発し始める。

(く、そう……こんなヤツに、こんなことされるなんて……!)

黒布越しとはいえ、ペニス状のおぞましい触手で乳房を愛撫される屈辱。それだけでも気が狂いそうなほどの嫌悪を覚えているのに、汚^けらしいその行為に悦びを覚えてしまう身体がもつと悔しく、恥ずかしい。

「柔っこくつてムチムチしてて、気持ちいいオッパイだな。出ちまいそうだぜ」

「え？ あ……っ!？」

肉釣鐘に感じるいくつもの龟头が、急に熱く、硬くなつた。緑の肉紐が細かく震え、青筋を立て——ピュピュッ！ ドピュピュッ！ 白く濁つた粘液が、美乳を包み込んだ黒布に浴びせられる。

(う、うう……イヤ、汚いっ!)

胸丘の上から谷間へと垂れ落ちる、ドロリとした粘り気。

肌に染み込む熱。

鼻腔粘膜を刺戟する青臭い香気——。

息を止めても、匂いが鼻に絡みついてくる。ギョッと瞼を閉じ顔を背けたのに、黒い膨

らみを汚した白濁液の映像はしっかりと網膜に焼きつき、消えてくれない。さらに……。

「ううう……え？ ああ、そんな……!?!」

乳肌を撫でる微風を感じ、慌てて視線を戻すと、黒いインナーにとろどろ穴が空いていた。臭液に濡れた場所。牡のエキスを嫌うようにナノマシンが散り、艶めかしく桜色に火照った柔肌が露わになる。

（溶けないって言っていたのに……!?!）

精液に見える液体は、実はウィルス型のナノマシンだった。服を構成する微細な機械に己のコードを注入し、接続機能を停止する。

が、理屈などどうでもいい。菊花には知り得ないことだし、直接肌に載ったソレはやはり、生温かな精液としか思えなかった。

「ぶっかけると溶けるのか。面白えな」

怪人が笑い、すべての触手を引つ込める。黒布に空いた大小さまざまな穴、そこから顔を覗かせる白くて肌理の細かい女肌——釣鐘型の頂上も丸く溶け、紅く膨れた肉突起が突き出ている。白濁液を纏った勃起乳首はまるで、濃密な練乳をかけられたイチゴのよう。

「おうおう、しっかり勃ってやがる。そんなに乳が気持ちよかったのか」

一本の肉紐が近づき、クウツと鎌首をもたげた。鼻先を乳肌に擦りつけて円を描き、粘液を塗り広げる。濡れた肉瘤で残った黒布を撫でて溶かし、穴と穴を繋げていく。

「き、汚いっ！ やめなさいっ！」

擦り込まれた臭液が、肌に染み込んでくるような錯覚を覚えた。おぞましい……と思うのに、小さな亀頭がヌルン！ と滑った途端、揺れる乳房に悦びが溢れる。

（そんな……どうして!?)

肉茸に揉み解された胸丘は、柔肉の芯に淫欲を溜め、いつもより一回りほど大きくなっていた。ほのかに紅く染まった白肌は透けるほどに伸びきり、空気の流れすら感じ取れるほど感度を増している。生温かなぬめりに這い回られると温かな気分が溢れ、頭の中に桃色の霧もやが満ちてくる。

「ふあ……ン、くふうう……」

喰い縛った菌の根が弛み、甘い吐息が漏れてしまった。膨れ上がる恥ぢずかしさ。心臓が乱れ打ち、耳の裏や髪の毛の生え際にジワッと汗が滲む。

「可愛い声が漏れたじゃないか。本当はやめて欲しくないんだろう？」

「そんなわけ、ない……あふっ!?’

いきなり激しくしごかれる乳麓。シユルン！ と触手が巻きつき、柔肌を擦りながら締めつけてくる。ただでさえ大きな肉釣鐘が、根元を搾られてさらに膨れ上がった。張り詰めた肌が見るうちに紅くなり、乳首がさらに痼とり勃たってピクン、ピクン、と拍動する。
（なに、コレ……む、胸が、熱い……っ!?)

（ああ太い……硬い……っ！ 身体が、振れ、ちゃううう……！）

剛直を感じた直腸粘膜がカアッと熱を帯び、背骨と腰骨の境目に疼きが膨れ上がった。ジツとしていられない気分。ウエストがはしたなく捻れ、乳房がたぶたぶ踊り出す。

「やっぱりコイツ、初めてじゃねえぞ。尻に挿入られてよがってやがる」

「おしゃぶりも巧え。綺麗な顔して、結構ヤッてんじゃねえか」

声の調子で嘲笑われていることは分かった。だが、羞じらうだけの余裕がない。

（ああ、イイ……口も、お尻も、オッパイも……みんな、イイ！）

肉棒の硬さに、唇や舌が蕩けている。ペニスの弾力に貫かれた直腸が気持ちいい。下を向いた乳房は若い男の手に力強く揉まれ、淫熱の塊に変わっていた。耳朶や乳首、クリトリスなど、身体から突き出た場所は真っ赤に熟し、軽く触れられただけでも心地よい電流が炸裂する。

「ふあ、ふあああああ……あ？ ンあ、あああアッ!!」

カアッと燃え上がる尻穴。菊花の排泄孔を犯した男がゆつくりと腰を引き、硬いカリ首で直腸粘膜を揉み上げたのだ。

「ああダメ、ダメ、お尻は、お尻はああっ！」

膣で感じる舞い上がるような快感と違い、刻み込まれるのは灼熱の痺れ。腰の感覚が炙り熔かされ、下半身から力が抜けた。肉棹に絡みついた肛門が肉色のフジツボのように盛

り上がり、紅い粘膜が捲れ返る。

（か、掻き混ぜられる……お腹、掻き混ぜられちゃう……っ！）

尻穴の裏側に引つかかったエラが、再び奥を目指す動き。ジーンと痺れた肉穴が力強くマッサージされ、淫熱に蕩けていく。捻れた背中が緊張し、吊り上げられた片脚がピーンと引きつった。尻肉が引き締まり、剛棒を啜えた肛門がしゃぶるように蠢く。

「うえあ、あ、あああっ！」

少しずつ速度を上げる肉棒に、上擦った喘ぎ声を漏らす女刑事。チンピラの腰が打ちつけられるたび、ズズン、ズズンと快感の津波が背を駆け上がる。脳髓が洗われ、意識が押し流れそうになる。

（ああ、イイ……お尻、すごいイイ！）

バイザーの下で、潤んだ瞳が焦点を失う。ペニスの太さに引き伸ばされた唇から涎が垂れ、アスファルトにポタポタと落ちた。

「おら、怠けるんじゃねえ！」

「んぶっ!？」

栗色の髪が乱暴に掴まれ、口を犯した男が腰をぶつけてきた。猛々しい肉茸がグポ、グポと喉にはまる。

（く、苦しい……でも、オチンチン……コレ、オチンチン……）

悦びを与えてくれる肉の棒。精液を嘔き出してくれる、大切なモノ——胸の内に欲望が渦巻き、ワケが分からない。子宮に蠢く淫獣が、精液を求めて激しく暴れるのだ。

(欲しい、ちようだい……精液、美味しい精液を、ちようだい……)

出入りする男根に舌を絡め、カリ首や裏筋に唾液を塗り込む。唇を締め、頬を窄めて、熱心に吸い立てる。

じゅば、じゅば、じゅば……ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ……。

「美味そうにしゃぶりやがるな。そんなにチンポが好きか？」

口と尻に発する卑猥な音に昂奮したのか、順番を待っていた少年が膝立ちになり、腰を前へ突き出した。硬く痼った分身を握り、菊花の白い脇腹に擦りつける。反対側の少年は栗色の髪を手に取り、ペニスに巻きつけてシコシコと擦り始めた。背にも、乳房にも、灼熱の肉塊。

(ああ、オチンチン……身体中に、オチンチンが……)

全身の柔肌が性感帯になってしまったようだ。肉クサビを感じた場所がジーンと痺れる。周囲に漂うほのかな精臭を吸い込むと、子宮に宿った淫獣が飢えを訴え、暴れ始めた。

欲しい、欲しい、欲しい——精液が欲しい。

(ほ、欲しい……せい、えき……白くて熱くて、ドロドロの……)

侵蝕される意識。

どこまでが自分の欲求で、どこから淫獣の欲望なのか、分からない。

「んちゅうう……んちゅう、んちゅう、んちゅう！」

口唇愛撫が激しさを増す。猛々しい肉塊で埋め尽くされた口の中、舌を激しく閃かせ、涎を垂らしながら頭を前後へ振り立てた。尻穴をキュウ、キュウ、と窄め、ペニスを搾り上げる。

（こ、こつちにも、挿入てよお……ウズウズしてるのよおっ！）

仲間外れにされた膣穴が、狂おしく疼いていた。肉隔壁のすぐ裏側では、たくましい肉塊が荒々しく動き、繊細な粘膜を揉み上げているのに、余波に揺すられて牝汁を滲ませる淫穴は空洞のまま。細かな襞が淫らに火照り、剛直を求めていやらしく蠢く。

「いえふえ、いえふえお、うじゅいてるのよおおっ！」

六本も男根があるのに、どうして挿入てくれないのか——少し前まで必死に拒否していたことなど忘れてしまった。剛棒に犯された尻を振り立て、狂ったように腰をくねらせる。腹に垂れた股間装甲がパタパタ閃き、ヘソを叩いた。腕の間でたわわに実った乳果が激しく踊り、麓にめり込んだゴルフボールに揉みまくられる。

「どうした？ どこに挿入て欲しいんだ？」

ニヤリと笑った怪人が、紅い長手袋に絡みついていた触手を解いた。自由になる腕。んは、と嬉しそうに頬を弛めた女刑事は、乳房の谷間を通して手を伸ばす。

——ムニユ。

自らの腕に押し分けられる双球。胸丘が捻れ、ボールを連ねた形の紅い装甲が麓の柔肉に喰い込んでくる。ねつとりと汗ばんだ乳肌をしごき、揉み上げる金属の塊。力強い愛撫が気持ちいい。そして、それ以上に——。

「んあ、んふああ……っ！」

壺口に硬いモノが触れた。肉穴に走る強烈な電流。子宮が緊縮し、膣の中に熱い羊水が噴きこぼれた。ゆつくりと指を挿し込んでいくと、いやらしく歪む粘膜穴からぐちゅちゅ、ぶちゅちゅ、と淫水が噴き出してくる。動く掌がクリトリスを押し潰し、しごき上げて、恥丘に次々と熱いモノが炸裂した。

だが、足りない。

自分の細指では、太さも長さも足りない。

（挿入て、挿入て……熱いのを、いっぱいいっぱい、中に出してえ……！）

男根に塞がれた口の代わりに、身体を揺すって乳房を踊らせる菊花。はまり込んだ腕に擦れて、汗ばんだ乳谷がヌチュヌチュと鳴る。淫裂に挿し込んだ指を激しく動かし、粘度の増した淫水を掻き出して、甘酸っぱい牝香を振り撒き牡たちを誘う。

（見て、見て……私を見て！　こんなになつてるのよ、こんなにいやらしいのよ！）

だから遠慮せず、ココに挿入て——二本の指を挿し込んで、内部でV字に開いた。ぐぼ

ん、と開く粘膜穴。満開になった肉花卉がいやらしくヒクついて、水飴のような牝汁をダラダラと垂らす。

「くう！ ダメだ、我慢できねえ！」

激しい舌遣いに耐えられなくなったのか、鼻絆創膏が突然叫び、腰の動きを早めた。尻に取りついた少年は真つ赤な顔をし、声も上げられないほど昂奮して力強いピストン運動を繰り返す。

ぐぼくぼくぼ……ぐちゅぐちゅぐちゅ……

どちらが口から立つ音か、どちらが尻から立つ音か。激しい突き込みに口唇粘膜が蕩け、排泄孔に悦びが充満する。

「むふあああつ！ あふい、せなふあ、あふいっ!!」

剛棒を擦りつけられた背中が煮えていた。亀頭の鼻先に穿られたヘソも、気持ちいい。男根に奉仕させられている栗色の髪に微弱電流が走る。胸の下、重々しく弾む乳房の側面が、長手袋の縁を飾るフリルにさわさわと撫で回され、蕩けてしまえそう。

「んへあ、へあ、うへああつ！」

全身から次々と打ち寄せる高波。臉の裏で明滅する閃光。なにもかもが吹き飛ぶアノ瞬間が、ものすごいスピードで近づいてくる。

(ま、待って待って、ココも、膣も、搔き混ぜてえっ！)

男たちに負けないよう、膣穴に突き込んだ中指を素早く動かした。歪む淫唇に弾ける電撃。クリトリスから子宮へ向けて、快美な針が突き刺さる。脳天を突き抜けていく激感に傾いた背が鋭く捻れ、触手に吊り上げられた片脚がビクン！ ビクン！ と痙攣する。

「くはあっ！ もっふお、もっふおおっ！ んちゅ、んぼんぼんぼ……っ!!」

意識を真っ白に塗り潰す淫悦の中、熱烈な口唇愛撫はさらに激しさを増した。尻肉も痙攣し、蠢く肛門の中で直腸粘膜が捻れて、ペニスをしゃぶり立てる。

（来て、来て来て……中に、私の中に、出してえ——っ!!）

髪を振り乱し、細い腰をくねらせて悶えた。頬が凹むほど男根を吸い立て、尻穴を窄めて剛直を搾る。

「コ、コイツ、すげえ！ チンポが蕩けそうだぜ！」

叫んだチンピラが、顔を真っ赤にしながら腰の動きを速めた。喉穴をグポグポ挟む亀頭。括約筋を揉み解し、直腸粘膜をしごき上げるたくましい剛直。

（ああ、私、滅茶苦茶……滅茶苦茶に、掻き回されてるうう！）

激しくしごかれた肉穴がグチュグチュ鳴り、淫らな熱を発して蕩けていく。身体中が熱い。荒々しい抽送ちゆうそうに内から突き崩されて、全身がまるでプリンのように。

「んあ!? あ、おひんひんが、おひんひんがああ！」

胎内に感じる肉棒が急速に熱くなり、ムクムクッと膨れ上がって——。



「せ、先輩……」

長谷の強張った瞳に映るのは、グツとうしろへ突き出された菊花の尻。白桃のごとき媚尻の中央で、肛門が紅く捲れ返り、奥に注がれた精液を涎のように溢れさせながら、ゆるゆると窄まっている。そして、その向こう――。

「うう……ん……」

紅いグローブに包まれた女刑事の細指は、まだ肉畝の中に埋もれていた。牝蜜にまみれてヌメヌメ光る粘膜穴を歪め、肉ピラの端を激しく擦っていやらしく蠢いている。

（あ、れ……イッた、のに……どうして、私、こんな、こと……）

膣の中のウズウズは、まだ癒えていなかった。いや、前よりも強い。精液が注がれなかったから、子宮の主となった淫獣の幼生が怒っているのか。肛姦の悦びが過ぎ去ると、粘膜襞の狭間に小さな炎が灯った。恥丘の裏がジリジリ灼ける。早くなにかでしごかないと、火傷してしまいそう。

「あううう、挿入て、挿入てよおっ！」

仰向けになった菊花は、両手を恥丘に被せ、女陰を滅茶苦茶に掻き回した。脚線美の浮き上がるラバーストッキングの膝を曲げ、ハイヒールで路面を捉えて、クウツと腰を持ち上げる。太腿の筋肉が引きつり、肉唇がぱっくりと開いた。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ……。

いやらしい衣服にまで神経の網目が張り巡らされているように、淫棒を擦りつけられた場所の柔肉が煮え立つ。塗りつけられた先走り汁が染み込んできて、なんでもないはずの肌がジンジン痺れてしまう。

「にやううう……ろけるうう、ろけちゃううう……んあぁッ!？」

胎内に稲光が閃いた。熱い塊が爆発したような感覚。イソギンチャクペニスが膣奥に突き出た瘤状の膨らみを包み込み、女体にしかない秘された性感極点——ポルチオ性感帯に肉クサビを擦りつけてきたのだ。キュウ、キュウ、と圧力がかかるたび、熱いモノが弾けた。腰が勝手に跳ね上がる。まるで高圧電流を通してられているよう。

（あうあぁっ！ オッパイが、オッパイがあぁ！）

膣穴に閃く稲光に弾かれて狂ったように悶えると、ボールを連ねたリングに乳麓が激しく揉み込まれた。喰い込む硬さ。柔肉が燃える。金属の表面にしごかれた乳肌が、熱く燃えて蕩けてしまいそう。さらに。

「にゃひ、ひ、ひいっ!!」

肉釣鐘の頂点に弾ける火花。尖端に吸盤を生やした変形男根が、ゆさゆさ揺れる美乳の頂点にしっかりと吸いついているのだ。弾けんばかりに熟しきり、クリトリスほどに敏感さを増した肉突起がキュウ、キュウと甘噛みされる。

（あぁである、である、でちゃうううッ!!）

乳腺が吸られ、胸奥に溜まった溶岩が吸い上げられた。乳頭がウズウズし、紅いスポットの裏側に煮え滾ったモノが迫り上がってくる。

「しうう、しう、しう、しんりやうううッ!!」

身体の内も外も、感じすぎていた。前とうしろから荒々しく突き上げられるたび、全身を快感電流が駆け巡る。唾えたペニスをしゃぶり立て、握った男根を激しく擦れば、溢れる悦びに身体中の筋肉が勝手に引きつってしまふ。ゆさゆさ揺れる乳房が張り詰める。子宮が沸騰する。

（あああ……オチンチンが、硬く、なるううっ！）

唇や膣穴に感じる肉棒が急にムクムクッと大きくなった。火傷しそうなほど熱くなり、銅のように硬くなって――。

ビュクッ!! ビュクビュクッ!!

ドピュピュッ! ドブドブ!

膣奥を叩く煮え滾った溶岩。S字結腸に注入される沸騰した奔流。しごかれ蕩けた繊細な粘膜が、熱い粘液を浴びて一気に燃え上がった。

「ンアアアアアッ!? あちゅい、あちゅひっひい、いいイイックウ――ッ!!」

羽ばたくようにビクビクッ! と仰け反る菊花。仰向く顔に、激しく踊る胸乳に、粘液のダマが降り注いだ。両手に握った肉棒や太腿や腹に擦りつけられていた男根が、一斉に

白濁液を噴出したのだ。飛沫を受けた頬にも、胸谷にも、激感が弾けた。身体中のあちこちに、次々と閃く眩い光。意識が切り刻まれる。あらゆるものが白く霞んでいき――。

ピユ！ ピユルッ！！

「にやうあああッ!? おっばい、おっばいがああッ!!」

突き出された胸の上、激しく縦揺れた巨乳の先から、乳液が勢いよく噴き出した。溜まりに溜まっていた母乳だ。細管を駆け抜ける液体に、硬く痼った肉豆を内側から突き揺すらされて、

「きゅひいいッ!! はヒイ、ひ、ひいとまんない、おっばいがとまんないいいッ!! うああ、イクイクうう、またイツちやうううつつつつ!!」

炸裂する火花に弾かれて、極みのさらに向こうへ。

伸び上がった肩や腹、細いうなじの柔肌に、サアッと艶めかしい朱がのぼる。毛穴という毛穴が開ききり、濃密な牝フェロモンが吹き出してきた。精液に汚れたバイザーの下で焦点を失った瞳がゆらゆらと揺れ、喘ぐ唇の端から白濁液混じりの唾液が垂れ落ちる。

(だ……だめ……しぬ、きもちよすぎて、しんじやう……)

恍惚に頬が弛んだ。長く尾を引く絶頂の余韻に、くびれたウエストが勝手にくねり、淫らなS字を描く。鼻の横から口端へトロリと垂れた精液を、無意識に伸びた舌が舐め取った。味蕾に広がる苦しょっぱい味。喉に貼りつき、ゆっくりと垂れていく粘り気。

(どろどろ……わたし、もう、どろどろ……)

むっちりした太腿やほどよく引き締まった二の腕を飾る紅いフリルに、白い粘液が絡みついていて、栗色の髪に落ちた白濁液はネロネロと流れ、頭皮を生温かく濡らした。大きく膨らみ輝くほどに伸びきった腹にも、べつとりと貼りついた精液のダマ。柔肌から牡エキスが染み込んでくる。咽ぶほどに濃い精臭に脳髓が痺れる。身体中が気持ちよすぎて、もうなにも考えられない——だが。

「さあ、交代だ」

息つく間もなく、新たな男たちがおぞましく変形したペニスを滾らせて群がってくる。肉奴隷と化した女刑事には、余韻を味わうヒマは与えられなかった。

※

——何人に犯され、どれだけの精を注がれただろう。

「ら……め……もうらめ、ゆるしてえ……」

糸の切れた操り人形のように長い手足を投げ出し、仰向けに転がってあうあうと喘ぐ菊花。熱く痺れた膣と肛門、ふたつの淫穴から、ドロリ、ドロリと青臭い白濁液が溢れてくる。揉みくちやにされた乳房は蕩けそうなほど火照り、悩ましい吐息に合わせて上下するたび、頂で震える肉突起から甘い芳香を放つ乳液が噴き出す。指先まで充滿した気怠い心地よさ。背の下にあるはずのアスファルトの感覚が淡い。なぜだかふわふわして、雲のべ

ッドに横たえられているようだった——と。

「は……はうあつ!? ああ、おにやかが、おにやかがあッ!!」

急に眉根を歪め、悲鳴を上げて藻掻く。大きく膨らんだ腹が激しく波打ち始めた。子宮頸管を押し分け、はみ出してくる熱い塊。瑞々しい精液を大量に呑んだ淫獣が、一気に成長し、自ら這い出してこようとしているのだ。

「うお!? なんか出てくるぞ!」

男たちが慌てて身を引くと、膣穴がグポッと口を開き、白濁液混じりの牝蜜をこぼす。

「うう、生まれる、生まれ、ちやううっ!」

メリメリ、メリメリと肉穴が軋んだ。痛くはない。淫獣の表皮から滲み出す淫毒が、膣粘膜に染み込んで感覚を狂わせているのだ。異形ペニスの快感が、まるでママゴトのよう。焼けつくような悦びが股間を支配する。

ぷしゅ! ぷしゅしゅっ!

激しく空腰を打つ股間から、薄く色づいた液体が迸った。膣穴の奥から這い出してくる肉塊に、膀胱が押し潰されたのだ。

「んはひい! オシッコ、オシッコがあ……イイイイッ!」

噴き出す小水が、尿道を細かく震わせてクリトリスを裏側から責め立てる。淫毒が生む、凄まじいばかりの快感に、甘やかな細波が加わって悦びが増した。腰がますます高くなり、

恥ずかしい噴水が虹を作る。

乳首からピュピュ！ ピュピュ！ と噴き出す乳液も止まらない。燃える股間に共鳴し、双球が煮え滾っていた。ほとんど真上に逆った白い液体は、小さな滴となって菊花の顔に降り注いだ。母乳の甘ったるい匂いに、頭の芯が痺れる。目尻が下がり、唇が微笑みを浮かべた。いやらしく弛む頬。涙がこぼれ、涎が溢れ出す。

「う、わ……これが淫獣か……」

驚く男たちが目にしたのは、粘液に包まれてヌメヌメ光る、赤黒い物体。蛇の頭を思わせる三角形の肉瘤と、それを支える太い棹——ペニスだ。突き込まれるべき肉穴を押し広げ、蜜まみれの淫唇を掻き分けて、ゆっくり、ゆっくりと這い出してくる。

「くえ、ンはあつ！ イイ、イイツ!! 気持ちイひいイッ！」

掠れた声で叫んだ女刑事は、自らの淫穴から伸び出してきた疑似男根をギュッと握り込んだ。途端に目元が蕩け、あへ、と気の抜けた吐息を吐く。

（な……なにコレ、すごい！ ゾクンってしちゃうう！）

ヘソの緒で母胎と繋がっているのか。紅いラバーグローブでギュウ、ギュウッと握ると、股間に激感が弾けた。粘液にぬめる薄い皮膜が、我を忘れてしまうほどに気持ちいい。肉瘤を指の間に挟み、力を込めて揉み込むと、鋭い快感が恥骨を打つ。棹部を挿んで親指を立て、亀頭の鼻先をキュッキュッとしごとくと、灼けるような電流が背を貫いた。

「ンくはあッ!! やあん、コレいい、らめ、おかしくなるううっ!」

栗色の髪を振り乱し、淫穴から生え出したペニス状の物体を夢中でしごく菊花。子宮に熱いモノが充滿する。

「あちゅい、あちゅいよおっ! おにやかが、あちゅいッ!!」

菊花にしごかれた幼生も、狂おしい愛撫に昂奮しているようだ。肉棒に似た胴体がムクムクッと膨れ上がった。細指に撫で回された亀頭が張り詰めて、表皮がルビーのように輝き始める。

(か、かたい……コレ、おちんちん……わたしのおちんちんが、はじけそう……!)
手指に感じる肉塊が、硬い。あり得ない器官の根元が狂おしく疼く。なにかがグツグツと煮え滾っている。

「なんだコイツ? 自分でしごいてるぞ」

見下ろす男たちが笑うが、菊花の耳には届いていなかった。

「うにゃあッ!? たまりゅ、たまりゅうう、あちゅいのがあぁ!」

初めて体験する男の生理。淫裂粘膜を思わせる紅いグローブでしごいていると、肉棒が蕩けてしまいそうに気持ちいい。なのに、子宮には重苦しい欲望がどんどん膨れ上がってくる。

(な、なに? なにコレ……ああ止まらない、手が止まらないっ!)



腰がクウツと持ち上がった。シュツシュツとしごかれていた疑似男根が天を向き、肉クサビが雄々しくエラを張り出す。子宮から肉棹へ、熱い電流が流れ出る。膨れ上がる爆発の予感。脳裏に白い光がピカ！ピカ！と閃いて――。

「うう、うううっ！ ああ出る出る、出ちゃうううッ!?」

ドドッ！ ドピュドピュッ!!

淫獣を内側から震わせて、勢いよく進む白濁液。子宮を直撃する激震に菊花は悲鳴を上げ、海老反りに反って激しく痙攣した。真上に飛んだ疑似精液が、真つ赤に染まった顔にポタポタと降り注ぐ。バイザーに汚液が貼りついて、視界を塞いだ。

「にゃひいいいっ!? にゃに? にゃああひいいい——ッ!!」

とめどなく吹き出す奔流が剛直を内側から突き揺らす。次々と弾ける絶頂感。頬ばかりか、全身の筋肉が弛んだ。溢れ出す涙、鼻水、涎。眩い光が意識を埋め尽くし、なにも考えられない。

「うによああああ……あへ、あへへえ……」

「チンポしごいて笑ってやがる。みつともねえなあ」

嘲笑った男が、爪先で菊花の肩を軽く蹴った。だが、恍惚とした女刑事は自らの手指で乳房を搾り、ピュピュ、ピュピュと乳液を迸らせながら、もう片方の手で膣口から生え出した肉棒を激しくしごき続けるだけ。

(イイ……イイよお……)

この快感があればもう、なにも要らない——と。

「おい長谷。お前も犯ったらどうだ？」

山崎の声が聞こえた。

キュン！

胸を刺す痛み。

(は……せ、クン……?)

淫らに蕩けた菊花の瞳が、ほんの少しだけ理性の光を取り戻した。なぜだろう、心臓がドキドキする。恥ずかしい、逃げ出したい——理由は分からないのに、落ち着かない気分。仰向けに横たわったまま首だけ持ち上げると、緑の触手から解放されてゆらりと立ち上がる青年の姿が見えた。顔が赤らみ、目がギラギラ光っている。股間には大きなテントが張っていて、その中にあるはずの剛直を想像すると股間がジュワツと熱くなった。

「強情を張っても無駄だって、分かったろう？ ほら、お前も犯れよ」

「け、けど……」

躊躇ってはいるが、鼻息も荒い。辺りに漂う濃密な牝香に冒されて、欲望が抑えられなくなっているらしい。

「その女がどうしても欲しいのなら、みなの前で犯して幹部になれ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

60号まであと一步!

成人向け雑誌
誌面完全サービス

2D DREAM MAG

月刊の巫女
無量集

超萌肉忍
MISS

偶数月
17日発売

95円

2次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法! 大ボウロム付録CD!

36本 & デジタルボムスター

38枚イッキ

奇数月
12日発売

モク

コミックアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!

コミックプリズム Volume 3 420円 18歳以上

オス後援院の執事様
オス専用

孝明

おのなかで
フルムビしてまっす

見られてニギヤな
中からー!

超
快楽カラフルSHOT!
おのなか
おエロ
おエロ
おエロ
おエロ

すっごく
濃

2・6・10月
下旬発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス Vol.1

MEGAMI CRISIS

強く美しいヒロ
淫らに陣つき
アンソロ

奇数月
中旬発売

人妻ゲーっ! 5人
淫らに陣つき

羨望忍アサ

高浜太郎 作画: 高浜太郎
ワルブルキム
chicou
ハーレム式
時久保久
目覚めのどきどき
美少女何回も
天道まき

Cover Illustration 高浜太郎

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキア

<http://www.comic-vaikyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!